

# 瑞医

世界に羽ばたくMEDIPORT

2019.5. VOL.39

contents

極 研究&教育  
Current topics in research and education

人 時の人  
People in the news

技 最新医療の紹介  
Latest developments on the medical front

和 お知らせ  
Information

## 医学教育分野別評価受審に向けて

2019年10月7日~11日に日本医学教育評価機構JACMEによる医学教育分野別評価を受審します。私は、教育担当副研究科長として認証評価の責任者を拝命いたしました。本学の医学教育が国際標準に準拠しているかが審査されます。病院機能評価と異なり合格しないとすぐに影響が表れるものではありませんが、本学の医学教育が国際基準に照らして適切に行われているかを自己評価し、外部評価を受けることは今後さらに医学部が改革・発展する上で大変重要なことです。

領域ごとに以下の責任者(敬称略)に取りまとめをお願いし、教授全員で自己申告書を執筆しました。



4月15日医学教育フォーラムの様子

領域1：使命と学修成果(酒々井眞澄)

領域2：教育プログラム(齋藤伸治)

領域3：学生の評価(松川則之)

領域4：学生(飛田秀樹)

領域5：教員(杉浦真弓)

領域6：教育資源(加藤洋一)

領域7：プログラム評価(早野順一郎)

領域8：統轄および管理運営(祖父江和哉)

領域9：継続的改良(安井孝周)



1月から3月まで連日行った早朝会議

今年の1月から道川誠研究科長、早野順一郎医学・医療教育学教授、杦山智則教育研究課員、西野幹郎医療人育成推進センター員とともに早朝会議を行い、自己点検評価報告書のブラッシュアップと受審準備を進めています。

新カリキュラムに基づいて、1月から4年生の72週間の診療参加型臨床実習が開始され、ポートフォリオによる評価も導入しました。2018年度にカリキュラム評価委員会を設置し、酒々井教授を委員長として、外部委員からカリキュラムを評価していただく体制を整えました。2018年1月には医療人育成推進センターを設立し、医学教育を研究・分析してカリキュラムや入学試験に反映させるためIR部門も設立しました。

私自身この受審を決定してよかったと思うことは、本学の医学教育に不足する部分が明確になったことです。医学教育に関わるすべての教職員と学生が本学の医学教育の良い点・不足している点を認識していただくために、4月15日(月)、23日(火)、5月7日(火)、14日(火)に医学教育フォーラムを開催し、多数の方にご参加いただきました。

本学の学生にはプロフェッショナルとしてふさわしい態度の修得も社会から強く求められています。すべての職員の方に、本学の医学生を育成していただければと思います。

文責:名古屋市立大学大学院医学研究科産科婦人科教授  
教育担当副研究科長杉浦真弓

### “瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPORT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出発し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。



### 教 育

#### 白衣授与式を実施しました。

2019年1月11日、さくら講堂にて、2018年度白衣授与式およびStudent Doctor認定証授与式が行われました。

当日は、医学部同窓会「瑞友会」の山本喜通会長、小椋祐一郎病院長、飛田秀樹医学副研究科長、杉浦真弓カリキュラム企画・運営委員長、服部友紀総合研修センター副センター長が出席し、間もなく臨床実習を開始する医学部新5年生102名に、白衣とStudent Doctor認定証を授与しました。

この日授与された白衣は瑞友会から寄贈されたもので、同窓会のロゴ(ハートのマーク)と学生の氏名が刺繍された特別仕様。学生を前にした山本先生は「白衣授与式では、同窓会のマークが入った白衣を贈るのが伝統。これまで先輩たちがしてきたように、責任感を持って実習に臨んでください」と激励の言葉を送りました。

真新しい白衣を受け取った学生たちは、さすがに感慨深げな面持ち。代表として決意表明をした学年代表・萩原睦さんは、臨床実習に臨む気概を語るとともに、「これからもよろしくご指導ください」と、教員への謝辞を述べていました。

白衣とStudent Doctor認定証を授与された学生たちは、同月15日より附属病院等における臨床実習をスタートさせました。今後は診療チームの一員として患者さんと接しながら、実際の医療現場において知識、技能、態度を磨いていくこととなります。伝統の白衣に身を包み、医療人としての第一歩を踏み出した医学部新5年生たち。彼らのため、我々教職員もより良い教育、より良い学びの場を提供できるよう、努力していきたいと思えます。



山本会長と学年代表・萩原さん



最後は皆で記念撮影

### 研 究

#### 「医学生・研修医等をサポートするための会」を開催しました!

愛知県医師会が男女共同参画の一環として主催する「医学生・研修医等をサポートするための会」が2019年2月6日、本学で開催されました。本会は、愛知県内の医学部4大学が順番で開催校となるもので、今年の当番校が名市大です!そこで、卒前・卒後教育に関わる人材育成を目的として昨春設立された医療人育成推進センターが企画・運営を担当しました。

懸念していた出席者数ですが、60名と会場はほぼ満席となり、M2からM6まで幅広い学年の学生と研修医の先生方が参加してくれました。今回のメインテーマは、「女性医局長からみた医師のキャリア&ライフプラン」。愛知県医師会長の柵木先生、本学研究科長の道川先生のご挨拶ののち、3名の医局長からご講演いただきました。皮膚科・西田絵美先生「ダイバーシティとキャリアプラン」、小児科・服部文子先生「50歳のとき、どんな顔になりたいですか?卒後20年で考えること」、眼科・加藤亜紀先生「家庭の数だけ答えがある～医師のキャリア&ライフプラン～」とタイトルだけでも魅力的な内容であったことを想像いただけると思います。女性医師を中心としたキャリア形成の具体例や、将来像、専攻医の過ごし方、座右の銘など、ご自身、そして医局長としてのお立場から踏み込んだ、普段の学会・研究会とは全く異なった発表となりました。座談会のセッションでは、予定していた(?)質問以外にも、学生、研修医のみなさんから将来についての質問をいただき、活発な会となりました。

サクラサイドテラスでの懇親会もノンアルコールの環境ながら、大いに盛り上がりました!女性のみならず男性の医学生、研修医のみなさんが具体的に将来を考える良いきっかけになったのではないかと思います。医学生・研修医のみなさんが未来へ大きく飛躍されることを期待しています。



道川研究科長からの挨拶



活発な質疑応答が交わされました

文責:医療人育成推進センター 安井 孝周

## 再生医療に関する協定締結記念特別講座 『もっと身近になる夢の医療～患者さんに届く「再生医療」の今～』を開催

平成31年2月4日(月)午後6時30分から、名古屋市立大学病院大ホールに於いて、市民や医療関係者など約100名が参加し、再生医療に関する特別講座を開催いたしました。

この特別講座は、平成30年7月に名古屋市立大学と蒲郡市との間で取り交わされた「再生医療の実施における相互協力に関する協定書」の締結を記念して行われたものです。

蒲郡市には医療用の細胞培養製品を開発・製造している企業(ジャパン・ティッシュ・エンジニアリング:J-TEC)があり、蒲郡再生医療産業化推進委員会を設置するなど市全体で再生医療のまちづくりに取り組んでいます。一方、名古屋市立大学病院では、形成外科と皮膚科による「白斑、改善が困難な瘢痕、難治性潰瘍に対する培養表皮移植の有効性の検討」など再生医療による臨床研究がいくつか実施されています。

夢の医療として期待されている再生医療も、私たちに身近な医療へととなりつつあります。郡健二朗理事長の開会あいさつの後、医師や企業それぞれの立場より開発から治療にいたる最新報告や蒲郡市の取り組みなどについて、鳥山和宏形成外科部長、飯島伸幸蒲郡市企画部長、畠賢一郎J-TEC代表取締役及び私による基調講演が行われました。また、森田明理副院長を座長に、鳥山氏、畠氏、私をパネリストとしたパネルディスカッションを行い、再生医療の将来展望について語られました。

閉会にあたっては、城卓志蒲郡市民病院CEOから名古屋市立大学病院と蒲郡市・蒲郡市民病院との連携により、より一層の再生医療の進展を図っていききたいとのあいさつがありました。

今後も蒲郡市民病院との共同研究や、市民を対象とした再生医療シンポジウムの共同開催などにより、再生医療の実用化と研究の活性化を通じて医学の進歩や社会貢献につなげていくことが本学の大きな使命の一つであると考えます。



パネルディスカッションの様子  
(写真左から)森田副院長、畠氏、鳥山氏、神谷センター長

文責:臨床研究開発支援センター長 神谷 武

## 「慢性疼痛に対する集学的アプローチの実際 —心理療法、理学療法をとりいれた多職種実践ワークショップ」の開催について

2019年2月9日に「慢性疼痛に対する集学的アプローチの実際」と題し、講演会とグループワークを開催しました。本イベントは、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム「慢性疼痛患者の生きる力を支える人材育成」、厚生労働省「慢性疼痛診療体制構築モデル事業」の一環として本学が主催したもので、名古屋市からも後援をいただきました。当日は、本学の郡理事長と名古屋市病院局の大原局長からのご挨拶がありました。

日本人の約15%以上が抱えているとされる「慢性疼痛」では、生物-心理-社会的要因が複雑に関与する場合があります。そのため、複数の診療科の医師や看護師、理学療法士、臨床心理士など多職種で診療にあたる「集学的アプローチ」が有効とされています。前半では、当院いたみセンター長の杉浦教授、副センター長/精神・認知・行動医学の近藤特任助教、吉戸理学療法士、酒井臨床心理士より、各職種の視点からの評価と治療の重要性について講演がありました。後半のグループワークでは、参加者に職種別に分かれて“即席の多職種チーム”を作ってもらい、実際のカンファレンスさながら、架空症例に対して評価と治療方針を検討し、集学的アプローチの実際を体験していただきました。ファシリテーターには、当院いたみセンターのスタッフを始め、日本大学医学部附属板橋病院痛みセンターの看護師、薬剤師、作業療法士の方にもご協力いただきました。

当日は、医療関係者を中心に、講演会には62名、グループワークには30名と多くの方にご参加いただき、大変活発な議論も交わされました。本イベントを通して、一人でも多くの方が慢性疼痛の多職種アプローチにご関心をお持ちになり、そのことで慢性疼痛を抱える方の生きる力を支える一助となったならば幸いです。なお、このような研修として「名市大 医療・保健 学びなおし講座」より「チームで取り組む慢性疼痛」の講義を今年度も開催しております。



講演会の様子



グループワークの様子

名古屋市立大学大学院医学研究科 精神・認知・行動医学 臨床心理士 酒井 美枝  
名古屋市立大学大学院医学研究科 麻酔科学・集中治療医学 / 名古屋市立大学病院 いたみセンター長 杉浦 健之



## 新任教授紹介

### 整形外科学分野— 村上 英樹 教授

2019年2月1日付で名古屋市立大学大学院医学研究科 整形外科学分野の教授を拝命し、生まれ育った“どんより曇り空”の雪国金沢を捨てて、ここ名古屋にやってきました。心も名古屋の空と同じく澄み渡っております。

私は、金沢生まれ金沢育ちで1993年に金沢大学を卒業し、ただちに富田勝郎教授の主催する金沢大学整形外科教室に入局しました。1994年1月からは福井県の市立敦賀病院で1年3ヶ月、1995年4月からは石川県立中央病院で1年9ヶ月の修練を積みました。その後、金沢大学の脊椎班に配属となり、富田勝郎先生と川原範夫先生のもと脊椎疾患の研究と臨床に邁進しました。1998年には、公益財団法人吉田育英会の海外派遣留学生に選抜され、米国エモリー大学に2年間留学させて頂きました。帰国後は、脊椎腫瘍と骨粗鬆症の研究を進め、2010年に金沢大学脊椎班チーフとなり、富田先生が世界に先駆けて開発した脊椎腫瘍の根治的手術を引き継がせて頂き、この手術をさらに発展させて基礎研究・臨床研究を進めました。その成果から、日本医師会医学研究奨励賞や高松宮妃癌研究基金研究助成などを受賞し、2015年には、タイのコンケン大学から招聘され、この手術を行いタイ王国政府から感謝状を頂戴しました。2017年には世界最大の整形外科学会である米国整形外科学会で、私の手術ビデオがアワードを受賞しています。

ここ名古屋市立大学でもこの脊椎腫瘍手術を続けて行ければと思っておりますが、整形外科学分野をまとめる教授として、整形外科の各専門グループが、世界の最先端を目指し研究し、その先端医療を患者さんに提供したいと考えています。しかし、ここまで医療技術が発展しても『医は仁術』、これが医療の原点であると思っております。常に患者さんとその家族の立場に立って考え、治療していきたいと思っております。



村上 英樹 教授

## 名誉教授のご紹介

### 耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野— 村上 信五 名誉教授

村上信五教授は1980年に愛媛大学医学部を卒業され、柳原尚明教授が主宰されていた愛媛大学医学部耳鼻咽喉科学教室に籍置き、県内の県立中央病院や十全総合病院で臨床研鑽を積まれました。また、同時に上原康生教授が主宰する愛媛大学第二解剖学教室で研究し、顔面神経の線維配列の研究で医学博士を取得されています。そして、1989年に米国のスタンフォード大学に留学し、Richard L Goode博士に師事し、中耳伝音機構に関する音響生理学研究を行われました。帰国後は原因不明で最も高頻度の顔面神経麻痺であるBell麻痺の病因究明に取り組みました。そして、留学中に知り得たPCRを用いて、1996年にBell麻痺患者の顔面神経内液から単純ヘルペスウイルス1型を検出・同定し、病因を突き止められました。そして、抗ヘルペスウイルス薬とステロイドを併用するBell麻痺の標準治療を確立されました。

1998年に名古屋市立大学医学部の耳鼻咽喉科教授に就任されてからは、脳神経外科医と協力して顔面神経麻痺や聴神経腫瘍など高度な手術に取り組み、名市大病院は顔面神経と聴神経腫瘍の手術で全国有数の施設となりました。学会活動も精力的に取り組み、第22回日本耳科学会や第117回日本耳鼻咽喉科学会総会など多くの学会を主催し、現在は日本耳科学会の理事長、日本耳鼻咽喉科学会の副理事長を務めておられます。また、学内では入学試験委員長はじめ中央手術部部長、IRB委員長、内視鏡部部長、医療安全委員長、副病院長等を歴任し、医学部ならびに病院の運営と発展に貢献されました。そして、現在は名古屋市立東部医療センターの病院長として、付属病院化や働き方改革、経営改善に精力的に取り組みられています。



村上 信五 名誉教授

耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野 講師 川北 大介

# 02 時の人 People in the news

## 名誉教授のご紹介

### リハビリテーション医学分野 — 和田 郁雄 名誉教授

和田郁雄先生は、昭和53年に名古屋市立大学を卒業された後、整形外科学教室に入局、関連病院で研鑽を積まれました。中でも名古屋市厚生院や更生援護施設緑風荘での勤務経験から、小児整形外科、足の外科、リハビリテーションを専門と定められ、昭和61年に整形外科学教室助手、平成12年同講師、平成13年リハビリテーション部助教授(19年より准教授、22年より病院教授)を経て、平成26年1月1日 リハビリテーション医学講座開設に伴い、初代教授に就任、このたび平成の終わりとともに、名誉教授とされました。



和田 郁雄 名誉教授

長年、股関節をはじめとする小児整形外科疾患、小児から成人までの扁平足障害の臨床医療に貢献され、この地域を代表する足の外科医として、在任期間間際まで、診療に尽力され、四字熟語が得意な和田先生らしく「一簣之功<sup>いっさいのこう</sup>」を全うされました。また、日本整形外科学会や日本リハビリテーション医学会で活躍され、多くの整形外科医、さらにリハビリテーション医を含めたリハビリテーションスタッフを育成されました。平成29年には、第42回日本足の外科学会学術集会会長、平成30年には第29回日本小児整形外科学会学術集会会長を務められ、有終の美を飾られました。

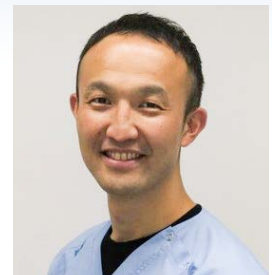
平成31年4月からは、愛知淑徳大学 健康医学部 スポーツ・健康医学科教授に就任され、令和の新たな世界へはばたかれます。今後のご健康と更なるご活躍を祈念いたします。

リハビリテーション医学分野 助教 村上 里奈

## 若手期待の星★

### 整形外科学分野 — 福田 誠 病院助教

平成31年4月1日より整形外科病院助教を拝命させていただくことになりました。これまで関連病院において整形外科外傷・再建治療に従事してまいりまして、この度、名古屋市立大学病院での救急・災害医療の機能強化に非力ながらお手伝いさせていただければと思います。整形外科外傷は災害・交通事故・高齢者の転倒・スポーツなどさまざまな場面で発生しますが、全てに共通することは「急に起きる」という事です。患者様は、外傷によって急に人生の中で「ピンチ」に陥る事になります。整形外科医の仕事は「患者様のピンチをチャンスに変える」事と考えています。つまり我々は、外傷治療を通じて、患者様に怪我をする前より精神的・肉体的に強くなっただき、その後の人生を豊かに過ごすチャンスを掴んで頂く事を目標にしています。



福田 誠 病院助教

患者様自身にとってもピンチの時にしか感じる事ができない、自分自身の健康の本質やその後の社会に帰ってからの人生の目標などを治療を通じて伝えていけたらと思います。

外傷が急に発生するが故に、その治療にもスピードが求められます。患者様を受け入れて頂く救急科を中心とした各専門科の先生方のご協力をいただきながら、スピード感のある質の高い治療を提供できるように努力させていただきます。

整形外科が担当する外傷は主に骨折になります。骨は造血器官でもあるためその中には、幹細胞や成長因子といった沢山の再生医療に応用できる要素が詰まっています。よって、骨折が治癒(骨癒合)するプロセスはまるで体の中の再生医療を見ているようです。この神秘的な現象を科学的に学びながら、骨折手術ができるSurgeon Scientistの育成にも尽力して参りたいと思います。皆さまのご指導・ご鞭撻の程をどうかよろしくお願い申し上げます。

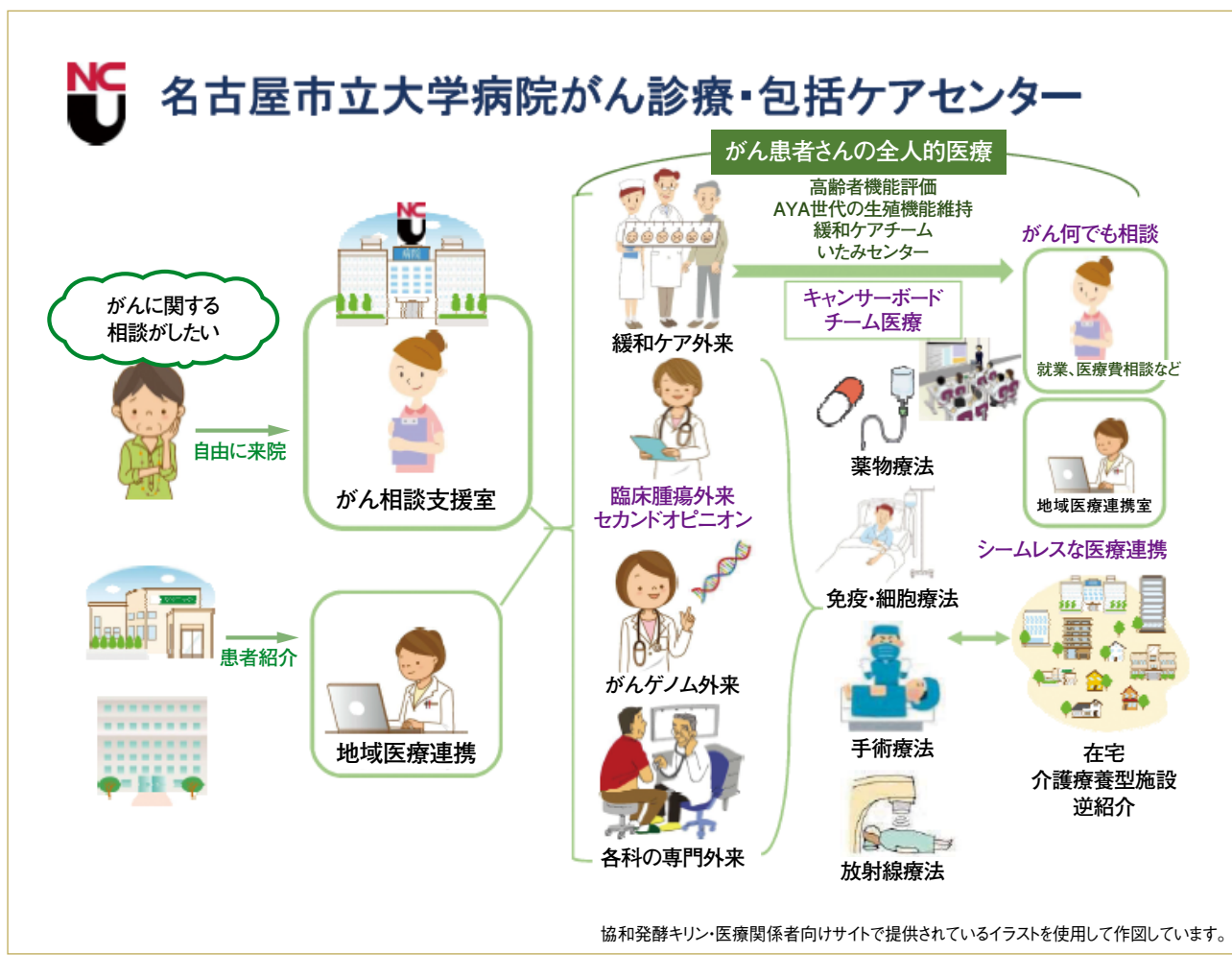
### 名古屋市立大学病院 がん診療・包括ケアセンターの開設

2019年5月に組織改編により名古屋市立大学病院「がん診療・包括ケアセンター:Cancer Treatment and Comprehensive Care Center」を開設します。同センターには臨床腫瘍部(化学療法部を改名)、緩和ケアセンター、がんゲノム医療部、がん医療支援部、乳がん治療・乳房再建センターが所属し、病院東棟の喜谷記念がん治療センターを活動拠点とします。さらに高精度放射線治療センター、低侵襲手術センターなど院内各部門と密な連携体制を構築し、全診療科・全職種による集学的治療と包括的ケアの提供によるがん患者本位の全人的医療の実現を目指します。

がん医療支援部は、市民が気軽にがんに関する相談が受けられるがん相談支援室を運営し、必要に応じて臨床腫瘍外来(がんの初診外来)、緩和ケア外来、がんゲノム外来の予約を可能とします。また、AYA(Adolescence and Young Adult)世代の患者さんの就業や妊娠(にんよう)性(せい)に関する相談までがん診療に関連したあらゆる相談の窓口となります。高齢者にやさしいがん医療の実現に向けて、包括的機能評価を実施し、合併症や介護環境も鑑みて患者さんに最適な治療を提案します。がん地域連携バスを充実し、在宅医療へのシームレスな連携を実現します。在宅がん患者さんの緊急緩和が必要となった際には、緊急緩和ケア病棟で対応させていただきます。臨床腫瘍部は、外来化学療法室運営に加えて、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬使用時の支持療法チーム体制の確立、「がん難民をつくらない」ために希少がんや原発不明がん患者さんの診療、薬剤師外来の充実、ゲノム医療を癒させたがん患者さんの診療を担当します。がんゲノム医療部は、がん遺伝子パネル検査の窓口を担い、必要に応じて治験実施施設の紹介も行います。偶発的に胚細胞変異が同定された患者さんに対しては、遺伝カウンセリング外来へ紹介します。

がん診療・包括ケアセンターを設立し、少しずつ理想に向けて体制整備を行っていきます。がんの臨床研究の活性化、検体バンクの稼働、薬学部や企業との共同研究によるバイオマーカー研究や創薬研究にも発展させていきます。

文責:飯田 真介(副院長 研究担当)





### 学生生活

#### ニューサウスウェールズ大学選択制臨床実習

1ヶ月間、UNSWのPrince of Wales Hospitalの感染症内科で実習させていただきました。実習を通じてよかったと思うことは大きくわけて3つありました。1つめは自分で考え自分から動く習慣が身についたことです。2つめは海外の医学生を実際にみる事ができたこと。1年のうちからBSLを行い、下級生でも高い臨床能力をもっていました。3つめとしては、留学を通じて自分の将来について見つめ直すきっかけを与えてもらうことができました。貴重な機会をいただき本当にありがとうございました。

医学部6年生 鬼頭 拓未

私はUNSWの関連病院の一つであるSt.George Hospitalの腫瘍内科にて4週間の臨床実習を行う機会を頂戴しました。腫瘍内科では主に抗がん剤治療を行います。末期癌の患者さんと医師が心を通わせ互いに信頼し合う様子が印象的でした。またUNSWの医学生と一緒に講義に参加し交流する事ができ、モチベーションも上がりました。この留学を通して学んだ多くの事を将来に活かしていけるよう、さらなる努力を積み重ねていきたいと思っております。貴重な経験をさせてくれたことを心より感謝申し上げます。

医学部6年生 恒川 彩香

実習の主な内容は、回診への同行、外来の見学、手術見学をする事でした。また、日本では出来ないようなユニークな経験もしました。私が実習した病院ではCardiothoracic Surgeryがとても強く、心臓移植に関しては世界的にも著名な病院で、この科の手術見学もさせて頂いたのですがその際に肺移植(DCD:心停止後移植)の臓器採りにも同行させて貰い、手洗した上で手伝いをさせて頂きました。日本の医学生でここまで関わられた者は、ほとんどいないのではないのでしょうか。とても良い経験を出来たと感じております。

医学部6年生 廣瀬 正明



3年生の腫瘍内科の授業に参加



一緒に消化器内科をローテーションした6年生と



オペ見学。スクラブ・術着を着用し手術に参加。

#### フィリピン大学マニラ校での大学間交流協定締結式の開催

2019年2月3日、フィリピン大学マニラ校(UPM)との大学間交流協定締結式がUPMにて行われました。主な参加者は、名市大側の澤本和延教授、岡本尚名誉教授、朝光かおりとUPMのDr.Padilla(フィリピン大学学長)、Prof. Quizon(公衆衛生学部学長)、Dr. Simbulan (Vice Chancellor for Academic Affairs)、Dr. Dela Rosa(Chief of the Office of International Linkages)です。

UPMは、1905年に創設された医学部を前身とする医療系大学です。人口約一億人を抱えるフィリピン国のトップの国立大学であり、卒業生は各界のリーダーとしてフィリピン国の発展に貢献しています。本学との交流は、岡本名誉教授の在職中から20年以上続いており、本学で学位を取得したフィリピン大学出身の留学生在がフィリピン大学衛生学部学部長に就任するなどしています。今までは感染症分野を中心に交流を進めてきましたが、これからは他の分野・他の研究科に交流の範囲を広げ、さらに両大学の関係を進展させていけたらと思っています。

名古屋市立大学大学院医学研究科細胞分子生物学 朝光 かおり



締結式が行われたCPH Auditorium前にて記念撮影  
澤本教授、Prof. Quizon、Dr.Padilla、岡本名誉教授  
(それぞれ左から2、3、4、5、番目)

#### フィリピンからの留学生を受け入れました

今年2月から約2か月間、フィリピンから泌尿器科医の Jethro Salvana先生が、腎・泌尿器科学分野に短期留学されていました。Jet (Jethro先生の愛称)先生は、日本泌尿器科学会がアジア泌尿器科学会メンバーに対して日本への留学をサポートする奨学制度「International Foundation Scholarship for Young A Young Asian Urologists」に応募され、選抜された大変優秀な泌尿器科医です。Jet先生は、数ある日本の大学から名古屋市立大学への留学を選んでくれました。留学中は、ロボット支援下手術や内視鏡手術の見学を精力的にされていました。また、腎・泌尿器科学分野で開かれたリサーチセミナーにも参加され、フィリピンでの男性不妊症への取り組みについて発表されました。フィリピンより20℃近く低い気候に戸惑いながらも、日本食をこよなく愛し、いつも笑顔のJet先生との国際交流は私どもにとっても大変有意義なものでした。

腎・泌尿器科学分野 講師 安藤 亮介



腎・泌尿器科安井教授・Jet先生・理事長郡先生と記念撮影

### 卒業式&入学式が行われました

平成31年3月25日に名古屋国際会議場センチュリーホールにて名古屋市立大学卒業式および医学研究科・医学部学位記授与式が行われ、98名の医学部卒業生が医師としての第一歩を踏み出しました。暖かな陽気の中、会場にはスーツ・袴姿の男子学生や着物・袴姿の女子学生があふれとても華やかな式に。6年間共に勉強してきた同級生やサークルの後輩との別れを惜しみながらも、新しい生活への期待に満ち溢れている表情がとても印象的で誇らしいひとときとなりました。

一方、4月5日には名古屋市公会堂で入学式が行われ、春の柔らかな日差しに咲く満開の桜のもと、新たに97名が入学。期待と喜びに胸を膨らませながらも、その緊張した面持ちは1年生ならでは。先立って行われた新入生歓迎会では、教職員や在学生が大勢集まり、初々しい彼らを賑やかに歓迎。これから立派な医師、研究者となるべくしっかりと歩を進め、成長して欲しいと願う、節目の日々となりました。



学位記授与式会場にて



新入生歓迎会の様子

### 尾崎康彦先生が名古屋市消防長表彰を受賞しました!

平成31年1月30日(水)に日本特殊陶業市民会館ビレッジホールにおいて平成31年名古屋市消防表彰式が開催され、医学研究科高度医療教育研究センター教授尾崎康彦先生が名古屋市消防長から消防協力者として個人表彰されました。

この消防表彰式は消防行政に貢献いただいた市民や団体の方々に対して、名古屋市長及び消防長より感謝状を贈呈し感謝の意を表すもので、昭和24年に第1回が開催され、今回で71回目の開催となり名古屋市長をはじめ参列者は1100名におよぶ盛大な式典です。

尾崎先生は平成24年から「名古屋市救急救命研修所」において産婦人科・周産期疾患及び分娩助産の講師として、これまで230名を超える救急救命士の養成教育に貢献してこられました。また平成27から29年度までの間、名古屋市の救急隊員の教育や愛知県の救急救命士約800名の再教育で、分娩助産の教育プログラムの作成から講義や実技指導に参画し、緊急度・重症度の高い院外分娩助産の対応力向上に大きく貢献されました。

これまで分娩に関しての教育はプレホスピタルの場からは需要の高い分野でありましたが、中々その機会に恵まれないのが現状です。それを尾崎先生が門戸を開いてくださったことにより、我々の合言葉である「愛知県の妊婦さんは、枕を高くして眠れる」よう、現場の救急隊員が自信を持って活動できるようになったことは、尾崎先生のご尽力の賜物であると確信しております。

今回受賞された表彰に我々救急隊員もあらためて感謝の意を表し、日々努力を重ねていきたいと考えます。

名古屋市消防局救急部救急救命研修所 井戸田 康二



### 令和元年度 名市大「医療・保健学びなおし講座」・「オープンカレッジ」の開講について

現在、「医療・保健学びなおし講座」春期、「オープンカレッジ」第1期の講座を開催しております。今後、下記のカリキュラムで講座を企画、受講生を募集する予定です。

#### 医療・保健学びなおし講座(秋期9月~12月)

秋期 講座	火	救急・災害医療スキルアップ~緊急事態で慌てないために~
	水	発達障害を学ぶ(2019):医学的理解から教育/療育へ
	木	Birth Tour 2019-安全なお産を目指して-

※7/22(月)~8/19(月)期間で受講生募集します。

詳細はHPをご覧ください

<http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/w3med/manabi/>

#### オープンカレッジ(第2期、第3期)

2期	9月~10月(金)	3期	11月~1月(金)
	救急・災害医療の最前線 社会のセーフティネットを知る		がんなんて怖くない! ~がん治療の最前線~

※7/29(月)~8/16(金)期間で受講生募集します。

詳細はHPをご覧ください

[www.med.nagoya-cu.ac.jp/w3med/philanthropy/opencollege.html](http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/w3med/philanthropy/opencollege.html)

※9/30(月)~10/18(金)期間で受講生募集します。

### ひとつこと☆メッセージ募集!

本誌では、皆様からの一言メッセージを募集します!無沙汰している同級生に、恩師に…ワイワイ楽しいお便りお待ちしております。ほっと和む「名市大人のつぶやきコーナー」をみなさんと作りたいと思います。

#### 例えばこんな一言を、

研究者紹介に載った同期・先輩へ。「おまえも、がんばってるみたいやん。」  
ごぶさたしている同窓生への近況を。「最近、腹が出てきました。」  
新米医師のつぶやき、女性医師必見!ウチの家事両立法!「ここが手抜きポイント!」  
などなど、必要事項を記入の上、葉書かe-mailで下記までお送りください。(注:次回掲載は9月です)

1.一言メッセージ(30字以内) 2.卒業年度 3.お名前(ふりがな) ※匿名希望またはペンネームでの掲載をご希望の場合はその旨をお書きください。\*4.住所 5.電話番号またはE-mailアドレス

《受付》〒467-8602 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地 名古屋市立大学 医学・病院管理部  
経営課経営係 広報担当宛 E-Mail:hpkouhou@sec.nagoya-cu.ac.jp

\*お送りいただいた個人情報については、お便りの採用に関する応募者への問い合わせ、確認以外の目的で使用いたしません\*

広報誌：瑞医(ずい)  
発行：〒467-8602  
名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地  
TEL(052)858-7114 FAX(052)851-4801

URL <http://www.nagoya-cu.ac.jp/>

※次号の発行は2019年9月下旬発行予定です。[年3回 1月・5月・9月]

☐☐  
我こそは  
通信員!

広報誌「瑞医」へ最新の話題をお届けして下さるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、E-Mail:hpkouhou@sec.nagoya-cu.ac.jp  
医学・病院管理部経営課経営係 広報担当まで